（資料）

第 16 回舟橋聖一文学賞

第 34 回舟橋聖一顕彰青年文学賞

第１６回舟橋聖一文学賞
授賞者

作品名	帆神（ほしん）　北前船（きたまえぶね）を馳（は）せた男（おとこ）・工楽松右衛門（くらくまつえもん）	出版社名	新潮社
著者	玉岡（たまおか）　かおる		
住所	兵庫県		

第３４回舟橋聖一顕彰青年文学賞
入賞者

優秀作品

作品名	順風満帆（じゅんぷうまんぱん）	作品部門	小説
作者	馬場（ばば）　広大（こうだい）	年齢	29歳
住所	宮崎県		

第１６回舟橋聖一文学賞

玉岡　かおる

『帆神　北前船を馳せた男・工楽松右衛門』授賞者コメント

私も同じ関西圏の人間ゆえ、彦根は、ひこにゃん登場前から親しみのある土地です。中でも子供の頃、旅行好きだった父に連れられ米原から彦根をめざして乗った汽車から見た風景は、今も強烈に記憶に焼き付いています。

それは冬で、父が突然窓を開け、あれをごらん、と西の方角を指さしたのでした。走り抜ける汽車の周辺は晴れているのに、田んぼの向こう、はるかかなたの市街地のあたりは冬曇り。しかも驚くべきことに、そこだけ銀鼠色の雲の塊が覆いかぶさり、いたぶるように、下界に雪を降らせているのです。

雪に包まれているのは、影のように浮かび上がる家々、そして抜きんでて高い、お城の輪郭。斜に降る雪にかき消されんばかりになりながら、意志を持って立つかのような。

彦根城だ、と父が教えてくれました。

開発で景色はすっかり変わったでしょうし、温暖化で雪も珍しいかもしれません。なのに、今回、舟橋聖一文学賞を頂戴することになり、あの幻想的なシルエットがよみがえりました。遠くで、まるで幻を見るかのように眺めた彦根のお城が、こんなにも明るく輝きながら近づいてくる、そんな思いです。

受賞作『帆神　北前船を馳せた男・工楽松右衛門』の主人公は、船乗りゆえに気象を命に刻んだ男です。人の力ではなしえない、何か超越したものを天に戴きつつ、地では人も必死に、懸命な努力をする。するとそこにはみごとな航路が開けることを、彼が示してくれましたが、今、そのことを確信させていただけたような感慨の中にいます。この作品に輝きをいただき、心よりお礼申し上げます。

玉岡　かおる氏　プロフィール

1956年（昭和31年）、兵庫県生れ。神戸女学院大学文学部卒。1987年『夢食い魚のブルー・グッドバイ』で神戸文学賞を受賞し、作家デビュー。2009年（平成21年）、『お家さん』で織田作之助賞受賞。2022年（令和4年）、『帆神　北前船を馳せた男・工楽松右衛門』で新田次郎文学賞受賞。主な著書に『天涯の船』『負けんとき―ヴォーリズ満喜子の種まく日々―』『天平の女帝　孝謙称徳』『花になるらん』『姫君の賦　千姫流流』『春いちばん 賀川豊彦の妻ハルのはるかな旅路』などがある。

『帆神　北前船を馳せた男・工楽松右衛門』あらすじ

江戸中期、播州高砂に漁師の子として生を承けた松右衛門は、船乗りに憧れ、兵庫津の回漕問屋に雇われる。やがて菱垣廻船の船頭として経験を積み、大阪・江戸間の番船競走に勝利して一躍その名を知られるように。独立して宮本屋を名乗り、北前船の海商として力を蓄える一方、当時の和船の弱点であった帆に改良を加え、その帆は「松右衛門帆」として全国に普及。さらに幕府に命じられて蝦夷地の港湾事業にも手を染め、ついには「工楽」の姓を与えられる――。熱情と才覚で江戸海運に革命をもたらした知られざる快男児と、彼を育み支えた四人の女の生涯を描く。

『帆神　北前船を馳せた男・工楽松右衛門』　［ 選評 ］

選考委員　　富岡　幸一郎

下剋上の戦国時代から、江戸幕府の成立によって平和が訪れるが、「戦う」時代が終っても、人は大いなるものを目ざしての戦いをやめることはない。漁師から身を起こし北前船を駆る海商となった男は、帆の改良という画期によって、この国の海運史を変えた。時代に新たな風を吹かせる力、この雄渾な物語こそ、閉塞感に陥っている今の日本人の心が求めているものであろう。素晴しい作品を受賞作とできたことを読書の皆さんと共に喜びたい。

第３４回舟橋聖一顕彰青年文学賞

優秀作品

作品名　　小説　　『順風満帆』　　作者　　馬場　広大

受賞してのコメント

まずは、今作の執筆にあたって影響を受けた多くの作家に感謝するとともに、敬意を表したいと思います。とりわけ、深沢七郎氏に土俗の洗練を、三浦哲郎氏に構成の技法を、色川武大氏に筆致の抑制を、それぞれ学びました。また、執筆中は、浜田省吾氏の楽曲「悲しみは雪のように」に何度も勇気づけられたことを、ここに記しておきます。

書くということは、先人たちの取り組みを念頭に、継承する意識を持ちつつ、どのように変化させていくか考えることだと思います。取るに足りない自分であっても、これまで続いてきた「時間」「歴史」の中に在ります。それを実感できたとき、書くことの面白さと、冷静な視点を得られると考えています。

今回、賞をいただいたことで、私の生活が劇的に変わったり、見識が突然深まったりすることはないでしょう。自分や近親者を元手にするやり方が、このまま長続きするとも思いません。今後も地道に本を読み、経験を重ね、技術を磨いたうえで、「悲しみ」を書いていきたいと思います。悲しみは時として笑いや優しさに変わるという実感を抱くことができたのは、今回のひとつの収穫でした。それが受賞という結果につながったことを、大変嬉しく思います。

選考委員の方々、関係者の皆さま、読んで意見をくれた友人に、深く感謝申し上げます。そして誰よりも祖父と、両親に、お礼の言葉を伝えたいと思います。ありがとうございました。

略歴

1993 年（平成 5 年)、鹿児島県出身。関西学院大学社会学部中退。2017 年（平成 29 年)、「みかんの木」で織田作之助青春賞受賞。2022 年（令和 4 年)、「山の女」で宮古島文学賞受賞。現在、会社員。宮崎市在住。

あらすじ

智明は、母によく電話をかける。ふるさとの島で祖父を介護する母の声から思い出されるのは、苦しかった学生時代だった。やがてやってきた祖父の死をきっかけに、智明は、母との関係を見つめなおすこととなる。

第３４回「舟橋聖一顕彰青年文学賞」　選考講評

選考委員　富岡　幸一郎

家族のぬくもりと生命の力

「舟橋聖一青年文学賞」は平成元年から設けられ、今年で 34 回目となる。これまでもこの賞の名にふさわしい青春の力にあふれる作品が受賞してきたが、本年も素晴しい作品を得ることができた。

「順風満帆」と題された本作は、鹿児島の南の島を舞台にして、そこで魚屋を営んでいて、今では介護を必要とする老いた祖父を中心にした一家の話しである。主人公の「私」は鹿児島本土から都会へ出ることを夢見て、東京の私立大学に入学するが、大学生活になじむことができず帰郷して、自販機のメンテナンスを行なう業務を請け負う会社で働いている。この「私」の視点から、父母の生活、そして祖父の姿が自然に生き生きと描き出されているが、何といっても死にゆく祖父への深い愛情がきめ細やかに浮かびあがってくるところがいい。十五歳で終戦を迎えた祖父の小学校の頃の話しとして、教室の黒板の上に祀ってあった昭和天皇の肖像を、朝礼の時間（その時だけ観音開きの戸が開き肖像が現われる）に、こっそり顔を上げ盗み見たエピソードなど、祖父の長い生涯の時間がしっかり細部として描き込まれている。小説は細部によって全体が輝く。そのお手本である。タイトルもさわやかであり、世代をこえて引き継がれていく家族の生命の力が伝わってくる好編である。

第１６回　舟橋聖一文学賞

玉岡（たまおか）　かおる　さん

第３４回　舟橋聖一顕彰青年文学賞

優秀作品　馬場（ばば）　広大（こうだい）　さん

舟橋聖一顕彰青年文学賞

過去の応募件数

年　度	青年文学賞	
	回数	満18歳～満30歳の青年
平成元	1	100
平成2	2	40
平成3	3	159
平成4	4	113
平成5	5	70
平成6	6	93
平成7	7	155
平成8	8	178
平成9	9	133
平成10	10	152
平成11	11	146
平成12	12	111
平成13	13	111
平成14	14	73
平成15	15	100
平成16	16	92
平成17	17	111
平成18	18	68
平成19	19	58
平成20	20	68
平成21	21	96
平成22	22	66
平成23	23	75
平成24	24	75
平成25	25	61
平成26	26	61
平成27	27	58
平成28	28	65
平成29	29	39
平成30	30	53
令和元年	31	25
令和2年	32	39
令和3年	33	40
令和4年	34	33

都道府県別応募件数

都道府県	応募件数
北海道	1
青森	
岩手	
宮城	1
秋田	
山形	1
福島	
茨城	
栃木	
群馬	
埼玉	4
千葉	1
東京	14
神奈川	4
新潟	
富山	
石川	
福井	
山梨	
長野	
岐阜	
静岡	
愛知	
三重	1
滋賀	(3)　3
京都	
大阪	
兵庫	
奈良	
和歌山	
鳥取	
島根	
岡山	
広島	1
山口	
徳島	
香川	
愛媛	
高知	
福岡	
佐賀	
長崎	
熊本	
大分	
宮崎	1
鹿児島	1
沖縄	
その他	
計	33

12都道府県から応募　　（ ）内　彦根市再掲

※令和 2 年度から応募要件を変更し、満 18 歳～満 30 歳の年齢制限を満 13 歳～満 30 歳に引き下げています。なお、今回の応募最年少は 17 歳でした。

舟橋聖一文学賞規程

（趣旨）

第１条　彦根市民が豊かな心を育み、彦根市に香り高い文化を築くため、舟橋聖一文学賞を制定し、彦根市名誉市民である舟橋聖一文学の世界に通ずる文芸作品に対し、賞を授与するものとする。

（授与）

第２条　舟橋聖一文学賞の授与は、年１回とする。

（対象）

第３条　舟橋聖一文学賞の対象となる作品は、次の各号に掲げる要件を備える作品とする。

(1)　作品の種別が小説であること。

(2)　毎年６月１日を基準日とし、概ね同日前１年に刊行された単行本であること。

（選考委員会等）

第４条　前条に規定する表彰候補作品を選考するため、舟橋聖一文学賞選考委員会（以下「委員会」という。）を置く。

２　委員会は、市長が委嘱する委員で構成する。ただし、舟橋聖一顕彰青年文学賞の選考委員との兼務は妨げない。

３　前項に規定する委員は４人以内とし、その任期は４年とする。ただし、再任は妨げない。

４　特に市長が必要と認めた場合は、顧問を置くことができる。

（委員長）

第５条　委員会に委員長を置く。

２　委員長は、委員会の委員の互選により定める。

３　委員長は、委員会を代表し、会務を総理する。

４　委員長に事故があるときまたは委員長が欠けたときは、委員長をあらかじめ指名した委員がその職務を代理する。

（会議）

第６条　委員会の会議は、必要に応じて委員長が招集し、委員長がその議長となる。

２　委員会の会議は、委員の半数以上が出席しなければ開くことができない。

３　会議の運営に関し必要な事項は、委員長が委員会に諮って定める。

（授賞）

第７条　授賞作品は、委員会の意見に基づき、市長が決定する。

２　授賞作品は１作品とする。ただし、授賞作品がないときは、この限りでない。

３　賞は正賞および副賞とし、副賞は賞金とする。

（補足）

第８条　この規程に定めるもののほか必要な事項は、市長が定める。

付　　則

この規程は、平成１９年７月２０日から施行する。

付　　則

この規程は、平成２４年４月　１日から施行する。

付　　則

この規程は、平成２４年９月２３日から施行する。

第34回「舟橋聖一顕彰青年文学賞」作品募集要綱

趣　旨

作家・故舟橋聖一氏は、井伊直弼公を題材にした小説『花の生涯』を執筆し、それが後に映画や演劇となり、また第1回のＮＨＫ大河ドラマとして放映されたことで、直弼公と彦根市の名が全国に知られるようになりました。そのため、本市では、このような多大なる功績をたたえ、同氏を彦根市名誉市民第1号にするとともに、広く青少年の文学奨励をはじめ、教育・文学の振興を図るため、同氏を顕彰する文学賞として、平成元年度から文学の登竜門となる「青年文学賞」を設けました。

今年度も下記のとおり、全国の青年から優れた作品を公募します。

記

1　設 置 者　　彦根市

2　選考委員　　佐藤　洋二郎（作家）
藤沢　周　　（作家）
増田　みず子（作家）
富岡　幸一郎（文芸評論家）

3　応募要領

(1) 応募作品　　小説・随筆・戯曲・評論
※同一作品部門の応募は、1人1編に限る。

(2) 応募規定　　400字詰め原稿用紙50枚以内（随筆については、10枚以内でも可）で縦書きとする。
（ワープロ原稿の場合は、A4サイズ横･1行40字×25行で縦に印字し、400字詰め換算枚数を明記する。）自作未発表の作品に限る。
※応募作品には、作品部門・題名・応募者の氏名（本名とそのフリガナ）・住所・年齢・生年月日・電話番号・メールアドレス（あれば）を明記した別紙（様式は問いません）を付けること。学生は、学校名と学年を明記すること。

(3) 応募資格　　令和4年9月1日現在、満13歳以上満30歳以下
（平成3年9月3日から平成21年9月2日までに生まれた人）
ただし、今まで入賞した作品部門での応募はできない（佳作を除く）。

(4) 締切期日　　令和4年9月1日（木）（郵送の場合は、当日消印有効）

(5) 提出先　　〒522-0001　滋賀県彦根市尾末町8番1号
彦根市立図書館内「舟橋聖一記念文庫」事務局
電話　0749-22-0649

(6) 提出方法　　郵送または持参（封筒の表には「青年文学賞応募作品在中」と朱書すること。）

(7) その他　　※応募作品は、一切返却しない。
※優秀作品の著作権は、彦根市に帰属する。
※最終選考に残った作品は、受賞録に作品名、氏名等を記載することがある。

4　賞　　優秀作品には、「舟橋聖一顕彰青年文学賞」を授与する。
正　賞　　賞状および舟橋聖一色紙
副　賞　　金　30万円

5　発表期日　　令和4年11月～12月予定（報道関係に発表する。）

6　授 賞 式　　令和4年12月予定

令和４年度「舟橋聖一文学賞」「舟橋聖一顕彰青年文学賞」選考委員プロフィール

佐藤（さとう）　洋二郎（ようじろう）（作家）

昭和２４年６月　福岡県生れ 元日本大学教授

平成　７年　　「夏至祭」で**第１７回野間文芸新人賞**を受賞。

平成１１年　　「岬の蛍」で**芸術選奨文部大臣新人賞**を受賞。

平成１３年　　［イギリス山］で**木山捷平文学賞**を受賞。

主な著書　　「福猫小判夏まつり」「夏の響き」「未完成の友情」「お母さんブタのダンス」「坂物語」「グッバイマイラブ」「TOKYO－BRIDGE 東京ブリッジ」「親鸞　既往は咎めず」「妻籠め」「佐藤洋二郎小説選集　１」「佐藤洋二郎小説選集　２」「Y 字橋」「未練」など多数。

藤沢（ふじさわ）　周（しゅう）（作家）

昭和３４年１月　新潟県生れ　元法政大学教授

昭和５９年～平成８年　　書評紙「図書新聞」の編集者を務めた。

平成　５年　　「ゾーンを左に曲がれ」で作家デビュー。

平成　７年　　「外回り」第１１３回芥川賞候補。

平成　９年　　「サイゴン・ピックアップ」第１１７回芥川賞候補。

平成１０年　　「砂と光」第１１８回芥川賞候補。

平成１０年　　「ブエノスアイレス午前零時」で**第１１９回芥川賞**を受賞。

「死亡遊戯」「SATORI」「ソロ」「サイゴン・ピックアップ」野間文芸新人賞候補。

主な著書　　「紫の領分」「焦痕」「箱崎ジャンクション」「第二列の男」「雪闇」「心中抄」「キルリアン」「波羅蜜」「武曲」「武蔵無常」「サラバンド・サラバンダ」「世阿弥最後の花」等

増田（ますだ）　みず子（こ）（作家）

昭和２３年１１月　東京都生れ

昭和５４年　　「ふたつの春」「慰霊祭まで」で芥川賞候補。

昭和６０年　　「自由時間」で**野間文芸新人賞**を受賞。

昭和６１年　　「シングル・セル」で**泉鏡花文学賞**を受賞。

平成　３年　　「夢虫（ゆめんむし）」で**芸術選奨文部大臣新人賞**を受賞。

平成１３年　　「月夜見」で**伊藤整文学賞**を受賞。

主な著書　　「道化の季節」「麦笛」「自殺志願」「内気な夜景」「火夜」等

富岡（とみおか）　幸一郎（こういちろう）　（文芸評論家）

昭和３２年１１月　東京都生れ　　関東学院大学教授　　鎌倉文学館館長

昭和５４年　　「意識の暗室　埴谷雄高と三島由紀夫」で、第２２回**『群像』新人文学賞評論優秀作**を受賞。

平成　元年　　「内村鑑三」で第２回三島由紀夫賞候補。

平成２４年４月　鎌倉文学館館長に就任。

主な著書　　「戦後文学のアルケオロジー」「仮面の神学　三島由紀夫」「使徒的人間　カール・バルト」「川端康成　魔界の文学」「平成椿説文学論」「入門　三島由紀夫」「古井由吉論　文学の衝撃力」「危機の時代の宗教論 ヒューマニズム批判のために」「石原慎太郎の時の時 「戦後」への最後の反逆者」など多数。

「作家・舟橋聖一」のプロフィール

舟橋聖一は、明治３７年１２月２５日、東京市本所区横網町に生まれたが、幼少時代から病弱のため学校を欠席がちであった。７歳の時、祖母に連れられて初めて「市村座」の舞台を観劇し、８歳頃から少年雑誌・新聞小説に親しみ、９歳から１１歳にかけて二葉亭四迷の「平凡」、国木田独歩の「牛肉と馬鈴薯」、岩野泡鳴の「耽溺」、田山花袋の「蒲団」、泉鏡花の「高野聖」等を愛読した。この時代の読書で身につけた教養が、その後の芝居と相撲に一生の情熱を注ぐ環境を作り上げたものと思われる。

大正１１年（１７歳）、水戸高校に入学するや、同人雑誌「歩行者」の同人となり、戯曲「支配する力」など数篇を発表した。また、菊地小劇場の東屋三郎の紹介で、小山内薫の門下に入った。

大正１４年（２１歳）、東京帝国大学に入学。池谷信三郎・村山知義・河原崎長十郎等と新劇団「心座」を結成。また、学内の文芸雑誌、「朱門」を阿部知二・池谷らと創刊し、初小説「信吉の幻覚」を発表した。翌年「朱門」に発表した戯曲「痼疾者」が、直ちに５月、新橋演舞場で、「心座」によって上演され、上司小剣、秋田雨雀に認められた。９月には、戯曲「白い腕」を菊地小劇場で「心座」によって上演された。１０月には、この作品を今東光推薦で〈新潮新人号〉に発表して、初めてまとまった原稿料を得た。また、「心座」では今日出海と知り合う。

昭和３年（２４歳）、新人作家１９名による「新人クラブ」結成に参加。その機関紙「文芸都市」の同人となり、同人の井伏鱒二、外村繁らと親交を結び、戯曲「襤褸」を発表。３月、東京帝国大学卒業。卒論は、「岩野泡鳴の小説及び小説論」。卒業後、明治大学予科講師となる。「文芸都市」に評論「演劇時評」を毎回連載（～昭和４年８月）。文芸家協会会員になる。

昭和４年（２５歳）、「心座」退会。劇作家から小説家へ転向する。

昭和５年（２６歳）２月、畏友・今日出海らと劇団「蝙蝠座」を４月に、小林秀雄、吉行エイスケ、井伏鱒二、今日出海らと「新興芸術派倶楽部」を結成する。６月、〈新潮〉に戯曲「バンガロウの秘密」発表。戯曲集「愛慾の一匙」を処女出版した。１０月、〈文学時代〉に「海のほくろ」を発表し、川端康成の賞賛を受ける。

昭和７年（２８歳）、「あらくれ会」の同人となり、徳田秋声門下になる。上越線車中で傾倒していた谷崎潤一郎に出会う。

昭和８年（２９歳）、「行動」創刊。中心的役割を果たす。翌年１０月、「行動」に「ダイヴィング」を発表し、行動主義の宣言をして文壇の注目を引いた。おりから、フランスの新文学に現れた知識人の政治的参加の行動性が話題になる時勢だったので、舟橋氏の能動性が時代のオピニオンリーダーの役割を果たすことになった。この時培われた精神力が、戦後日本文芸家協会の再建に、言論統制に、税金問題に、自分の信念を押し通す実行性と合理主義を兼ね備えることになった。

昭和１０年（３１歳）、「行動」が終刊、舟橋氏の行動主義への緊張がスランプに陥ることになったが、短編小説「木石」、評伝「岩野泡鳴伝」が、再び舟橋文学の面目を確保せしめた。戦争中は、時世にもろともせず、昭和１６年（３７歳）から執筆し、終戦間際に完成した「悉皆屋康吉」は代表的傑作である。

戦後は、執筆に対する制約がなくなると、「裾野」、「雪夫人絵図」、「花の素顔」、「芸者小夏」など愛欲小説が次々に発表され、名実ともに舟橋文学が確立された。

昭和２６年（４７歳）、日本古典文学の代表作「源氏物語」を平易に現代語で戯曲化した。戦後の歌舞伎に新作の流行を生み、演劇史上画期的な作品である。また、現代語による古典物を普及させるなどその意義は大きい。国文学趣向を取り入れた「ある女の遠景」は異色のもので、昭和３８年（５９歳）に「毎日芸術賞」を受賞している。歴史小説では、「白い魔魚」・「夏子もの」に次いでベストセラーとなった「花の生涯」や自伝小説「真贋の記」・「文芸的グリンプス」がある。

昭和３９年（６０歳）に、彦根市名誉市民第１号。昭和４２年（６３歳）には、「好きな女の胸飾り」で「野間文芸賞」を受賞。同年に芸術院会員となり、昭和５０年（７１歳）に文化功労者に選任されるなど、その功績は枚挙に遑がない。

昭和５１年（７２歳）死去。（１月１３日）

明治大学文学部教授。文芸家協会初代理事長。日本相撲協会横綱審議委員会委員長。運輸省交通委員。文部省国語審議会委員。中央競馬会名誉顧問。日本近代文学館創立常務理事など。